

なし新品種「おりひめ」の着果管理技術

1. 成果の要約

なし「おりひめ」の着果数は、樹冠占有面積1㎡当たり8果で、1果平均果重が約350g、糖度が約12%、収量が約2.8kg/㎡と安定した品種特性を示し、翌年の安定生産に必要な花芽を十分確保できる。

2. キーワード

なし、おりひめ、着果数、花芽着生、収量、大果生産

3. 試験のねらい

「おりひめ」は8月上中旬に収穫でき、単価の高い旧盆前に出荷できる食味良好な極早生青なし品種である。旧盆前は贈答用として大果の需要が高く、当面は、収益性が高い直売中心の販売が想定される。そこで、大果生産が可能で収量を十分に確保できる着果数を明らかにする。

4. 試験方法

試験は、平成26年に本場無加温ハウス、平成27年、28年の2か年は、河内農業振興事務所管内露地なし園において実施した。平成26年、27年の2か年は、高接ぎ3年生を2樹、平成28年は高接ぎ4年生4樹を供試した。処理は樹冠占有面積1㎡当たりの着果数を6果（以下6果区）および8果（以下8果区、写真）の2処理区とした。予備摘果は満開20日後に、仕上げ摘果は満開50日後に、補正摘果は満開90日後に行い、果実糖度、果重及び収量、花芽着生、新梢長などの樹体特性を調査した。

5. 試験結果および考察

- (1) 平成28年の収穫期間は8月1日から8月10日で、収穫盛が8月4日から8月5日と旧盆前となった。他の2年間も同様であった。（データ省略）。
- (2) 果重は、6果区で387g（3か年平均）、8果区で352g（3か年平均）となり、いずれの区でも、極早生品種でありながら大果を生産することができた（表-1）。
- (3) 平成28年に収穫した果実を出荷規格の構成は両区においてもほぼ同じであった。両区とも28玉>24玉>36玉の順に多く、36玉以上の果実割合が90%以上と高かった。（図）。
- (4) 3か年の平均糖度は、両区で12%を上回り食味の良い果実が生産できた。（表-1）
- (5) 3か年の平均収量は、6果区で2.4kg/㎡、8果区で2.8kg/㎡となり、極早生品種として十分な収量を確保することができた。また、8果区は3か年にわたり収量が安定した。（表-1）
- (6) 平成28年に花芽着生および新梢伸長への影響について調査した結果、総新梢長は8果区が6果区より短くなった。加えて、新梢本数や新梢基部径の値も8果区の方がやや小さかった。しかし、6果区はもとより8果区においても翌年の果実生産に必要な、腋花芽数や短果枝花芽数を十分確保することができた（表-2）。
- (7) 以上のことから、果実の出荷規格構成、収量およびその年次差が小さいこと、糖度、花芽着生への影響を勘案すると、「おりひめ」の着果数は樹冠占有面積1㎡当たり8果が適正と考えられた。

（担当者 研究開発部 果樹研究室 竹澤雅子）

表-1 着果数の違いが果重、糖度、収量に及ぼす影響（平成26年～平成28年）

処理区	実施年度	果重 g	糖度 %Brix	収量 kg/m ²
6果/m ²	平成26年	312	12.1	1.9
	平成27年	414	12.5	2.5
	平成28年	387	12.1	2.4
8果/m ²	平成26年	342	11.9	2.7
	平成27年	330	13.0	2.6
	平成28年	385	11.9	3.2
6果/m ²	(3か年の平均値)	387	12.1	2.4
8果/m ²	(3か年の平均値)	352	12.3	2.8
10果/m ² (参考区)	平成26年	308	12.1	3.1

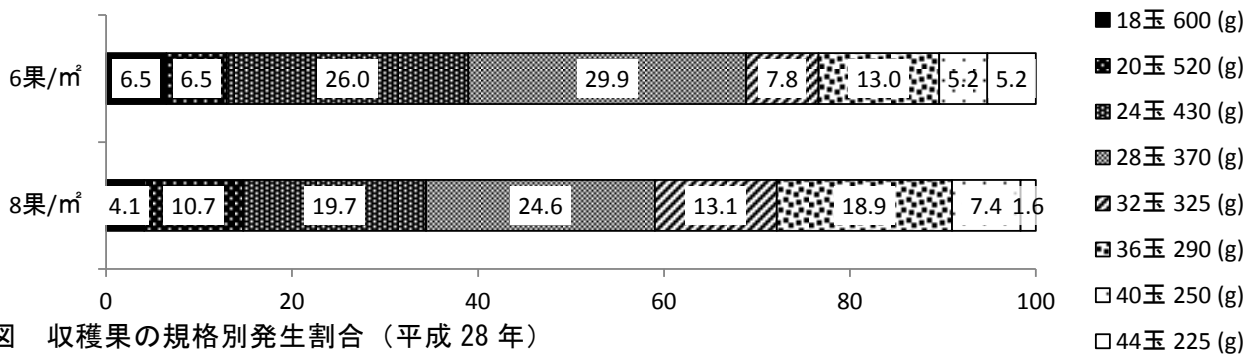


図 収穫果の規格別発生割合（平成28年）

表-2 着果数の違いが花芽着生及び新梢伸長に及ぼす影響（平成28年）

処理区	腋花芽数*1 芽/枝	短果枝 花芽数 芽/枝	新梢本数 枝/m ²	総新梢長 m/m ²	新梢基部径 mm
6果/m ²	25.3	14.7	13.9	14.7	12.3
8果/m ²	22.8	11.8	12.3	10.6	11.2

*1 腋花芽数=腋花芽数総数/新梢本数

*2 短果枝花芽数=短果枝花芽数総数/結果枝本数（結果枝の平均長 6果/m²:1.3m 8果/m²:1.0m）

*3 新梢基部径=全新梢の基部径(元から10cm)の平均

写真 8果/m²区の着果状況